

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

奈良県奈良市

○学校名

奈良市立都南中学校

○学校のURL

www.naracity.ed.jp/tonan-j

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各6学級、【特別支援学級】2学級、【合計】20学級

○児童生徒数

【全児童数】568人（平成24年5月1日現在）

（内訳：1年生200人、2年生174人、3年生187人、特別支援学級7人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

学校教育目標

- ・豊かな心をはぐくみ、自ら律し、自ら拓き、共に生きる学校の創造
- ・人間尊重の精神を基盤に、共に学びよりよく生きるための意欲と実践力のある生徒の育成

人権教育目標

- ・一人一人の生徒が発達段階に応じて、人権の意義・内容や重要性について理解し、自他の大切さを認めることができるようになり、実際の行動に表れるように育てる。
- ・様々な人権課題についての理解と認識を深めさせ、自分の課題として偏見や差別の解消に努めることのできる能力や態度を育てる。
- ・豊かな人権感覚を養い、認め、支え合うなかま集団づくりを目指す。
- ・小中連携を進める中で、校区全体としての取組の課題を明らかにする。

○人権教育にかかる取組の全体概要

指導のねらい

- ・人権を大切にする心を育てる。
- ・差別を見抜くことができる心情を育てる。
- ・差別をしない、差別を許さない態度を身に付けさせる。

- ・生命を尊重する心を育てる。
- ・望ましい人間関係を築く力を育てる。
- ・協力して諸問題を解決する力を育てる。
- ・ルールなどを守る規律ある心を育てる。

目指す教師像

- ・生徒理解に努め、一人一人を大切に作る教師。
- ・生徒・保護者、地域住民に親しまれ、信頼と尊敬を得る教師。
- ・地域を知る意欲のある教師。
- ・生徒の目標実現のために、粘り強く取り組む教師。

3. 特色ある実践事例の内容

◆取組のねらい

- 自尊感情を高める
- 親和的な集団づくり

◆取組を始めたきっかけ

全国学力・学習状況調査結果から、本校の生徒たちには、大きな学力格差の存在することが明らかになった。その一因として、自尊感情や将来展望の低さが考えられる。すべての生徒の学ぶ権利を十分に保障できていない状況もある。これらの課題の解決に向け、一人一人が大切にされる授業づくりを進め、積極的に学びに参加していける子どもを育てることを目指し、新しい学習スタイル（学びの共同体）を取り入れることにした。

◆取組の内容

① 自尊感情を高めるための指導内容や方法の創造

新しい学習スタイルを取り入れた「聴き合い、学び合う授業」において、生徒が共同して学ぶ中で、互いを認め合える場づくりに取り組んだ。具体的には、一斉授業で教師が一方的に教えるのではなく、ペアやグループで考えたり、活動したりすることを大切に授業づくりに取り組んだ。また、基礎学力の向上を目指し、新しい学習スタイルでの授業改善を図るとともに「おはスタ」（朝学習）



グループ学習を進める研究授業

や「補充スタ」（終わりの会学習）の充実に努めた。その評価については、学年及び全体での授業研究と生徒に対するアンケートにより検証した。

② 「親和的な集団づくり」のための調査を基にした研修と実践

「楽しい学校生活を送るためのアンケート」（以下、QU）の結果を基に、集団における個々人の位置を客観的に把握し、今後、親和的な集団や学習集団を形成するための取組について検討するため、学年毎に、粕谷貴志准教授（奈良教育大学教職大学院）を招いて研修を行った。そして、研修を通じて考えたことを基に、各学級担任が学級経営方針を見直し、課題のある生徒に対しての指導方策等

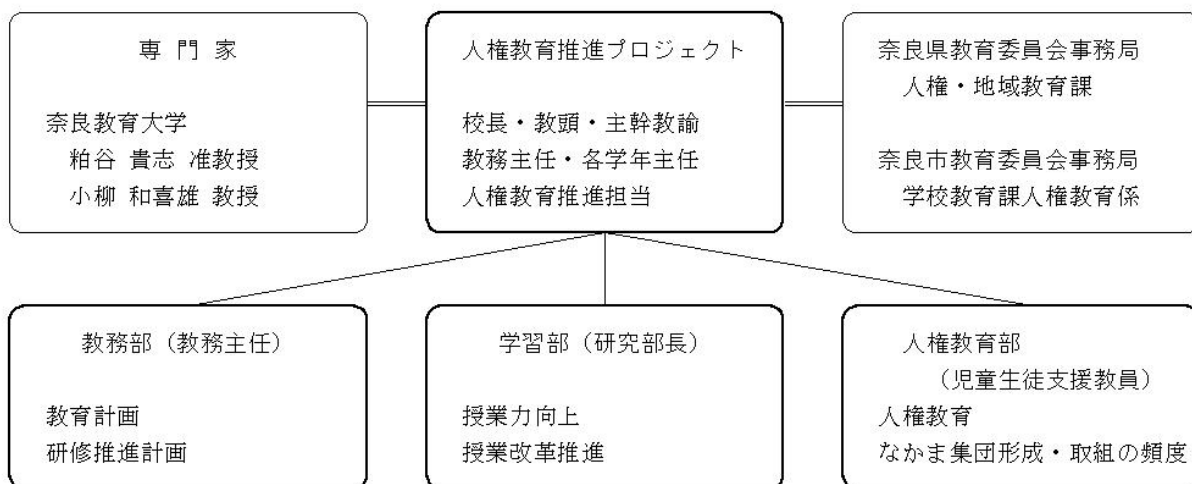
を「手だてシート」（図）にまとめ、学年の教師間で共有し、教師集団がチームとして生徒たちに関わる体制づくりに取り組んだ。

図 手だてシートの例

平成24年度Hyper Q-Uデータに基づく取り組みの計画

		3	年	□	組	担任名	○○ ○○
学級全体の傾向	リーダーの位置(生徒No. 51)	課題を抱えた生徒の位置(生徒No. 14)		学級の変容			
○Q-Uの結果から見られた学級の傾向性について	() 侵害行為 学級生活 () () 認知群 満足群 () あてはまるどころにマルをつける。 (○) 学級生活 非承認群 () () 不満足群	(○) 侵害行為 学級生活 () () 認知群 満足群 () あてはまるどころにマルをつける。 () 学級生活 非承認群 () () 不満足群		○学級全体に見られた変容の様子(具体的に記入)			
学級生活に対して満足できている生徒たちとそうでない生徒たちが大きく分離しており、「荒れの兆しがみられる集団」と判定。	考えられる取り組み	考えられる取り組み		最初は一人ひとりが同じ目的に向かって進んでいても、遠慮からくものなコミュニケーション不足で意味通がうまくいかず、クラスもバラバラだった。特に7月の合唱コンクールは最悪だった。2学期に入り、体育大会に向けて生徒同士で話し合う機会を増やしていきなかつた。それぞれの思いや立場を考えられるようになった。この頃からリーダーの成長が見られる。また第三者的にクラスを見る者もいたが、道徳の時間にグループで話し合い、次にクラス全体で話し合っていくという工程を何度も行ううちに、一人ひとりがクローズアップされていくようになった。自分の思いを出すことにだんだん慣れてきて、話し合うことに楽しさも見出せるようになってきた。そして、リーダーの一人が自分のルーツに焦点をあて、自分の等身大の思いを全校の前で発表する機会に巡り合ったことがクラス全体にとってとても大きいことだった。中には冷やかな目で見る者もいるが、リーダーの成長とそれを認める周りの人間の成長があったことも確かだ。			
○学級の現状・課題	学級活動に積極的に協力しようとする生徒は多いのだが、消極的な生徒たちへの声掛けがうまくいかずにあきらめてしまう現状がある。落ち着きがない場面も多くみられるので、規範意識をうえつけ、「安心」できる学級づくりを目指したいと考えている。	行事のときは率先してクラスをひっぱっている。まっすぐでひたむきな気持ちを前面に出すのだが、人間関係をつくるうえで言葉使いで損をすることがある。担任として、相手の立場にたった声掛けを意識させ、リーダーをはじめとする様々な役割の頑張りや貢献を認め合う学級集団にしなければと考えている。	自分中心の人間関係を築いている傾向にある。相手を思いやる気持ちを持たせられるよう指導をしていきたい。また生徒の素直で優しい面を見せたときに、それがクラスに浸透していけるようにしていきたい。また担任として日ごろから本人に声をかけることを心掛けていきたい。	○グループ学習の様子			
○グループ学習の現状・課題	グループで話し合うときには、出された課題にはきちんと向き合うのだが、意見交流はそれほど活発ではない現状がある。修学旅行では、比較的グループ活動を意識した活動ができたと考えている。これからもグループ活動の意義をしっかりと伝え、そのような場面を提供する必要性を感じる。	自分がまとめる立場になることで相手の立場を考える機会が増えた。本人なりに葛藤もしていた。しかし、それは自分本意ではなく前向きに進めようとする気持ちが本人の根底にある表れであると感じた。	まだまだ自分の思っていることをあまのじゃくに言ったり、そして他者への言葉かけは冷たく、きついものがある。しかし、それは恥ずかしさからの裏返しともとれる。しかし、少しずつではあるが、思ったことを素直に口に出せる場面も多くなった。	教科授業や道徳でのグループ活動では和気あいあいと意見交流する場面が多くみられた。また授業時間を超えて、放課後も生徒同士で学び合いや相談する場面も見られるようになった。			
	2回目の分析から見えてきた成果と課題(今後の方向性)	2回目の分析から見えてきた成果と課題(今後の方向性)					
	中心になることで他者の意見を知り、また自分の思いをみんなと共有することにもなった。しかしグループやクラス全体で話し合うことにはもっと時間が必要だ。	本人のありのままを認めていくことで自尊感情を育てることにつながった。今後クラスに本人の居場所を作り安心感を持たせてやることが必要である。また自分のことを素直にリーダーに話せるようにしていけるようにすることも必要だ。					

◆取組の主体や実施体制



◆取組を実現するに当たって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫

これまでは、課題解決のための取組が担任任せになりがちであった。手だてシートを活用した情報の共有・意見交換は、その状況を脱することをねらいとし、共通の目的に向かって、教員がチームとして生徒や集団の課題解決に取り組むという体制を築く契機となった。その効果は徐々に現れ、日常の様々な場面で、教師間での生徒に関する情報交換がなされるようになり、生徒の人間関係の形成に生かすことができた。また、文化発表会・体育大会等の学校行事の充実や日々の学級運営においても役立てることができた。

4. 実践事例の実績、実施による効果

◆取組が効果を上げた実際の事例

「荒れの兆しが見られる集団」とQUで判定を受けた学級の担任は、学級やグループ学習の現状を振り返り、今後の生徒への働きかけについて、2人の生徒を中心に計画を立てた（図）。

まず、学級のリーダーである生徒には、学級代表として行事等に前向きに取り組む姿勢を認め、相手の立場に立った言葉がけを意識させるように指導した。一方、自分中心の人間関係を築いている傾向にある生徒には、担任だけでなく、様々な教員からの声かけを増やすとともに、得意なことが生かせるような役割分担を工夫し、その働きぶりやクラスに貢献した頑張りを認めるように努めた。

学級においては、少人数やグループでの話し合いを大切にし、自分の思いを出す機会をできるだけ多くつくった。互いの思いを聴き合うことで、生徒と生徒をつないでいくことを目指した。さらには、その思いを学級全体での話し合いに反映できるように、小グループから学級全体へという「話し合いの工程」を何度も繰り返し行った。

子供たちは、小グループという安心できる環境の中で思いを出し、受けとめてもらう経験を重ねるうちに、少しずつ心の扉を開きながら関わりを深め合い、学級の中で一人一人の存在を大切にしようとする雰囲気が培われた。

5. 実践事例についての評価

QUのアンケート結果から見える学級や生徒の実態を、学級指導・集団形成の取組・学習指導につないでいくために、独自に手だてシートを作成し、計画を立て、教職員集団で共有した。このことにより、担任の思いや願い、子供の見方や手だてを共有することはできた。しかし、実際の細やかな関わりは担任によるところが多く、担任の力量によって成果にばらつきが見られた。



コの字型の授業の様子

今後は、手だてシートを基に、取組の方向性を共有し、更に共通目的に向かい、具体的な手だてを模索し、日々の関わりの中で全教員がいかに実践していくかが課

題である。また、研修においては、ロールプレイなどの参加体験型学習等、日々の取組に直接活用できるような研修も必要であると考え。

グループ学習を主体とした学力向上の取組、新しい学習スタイル(コの字型の机の配置等)を活用した学び合いを推進していくためには、まず、その基盤となる親和的な学級集団・学年集団をつくり上げることが重要であると共通認識できた。そのためには、中学校だけでなく、校区内の小学校・幼稚園・保育園と連携した継続的な実践が必要である。また、子供たちが学び、育ち合う環境を整えるためには、地域・保護者との連携も極めて重要である。

子供たちに、15年間同じ地域で育ち合ってきたなかまであることを意識させ、互いの力で支え合える集団を育てていくためには、地域・保護者への啓発などについても継続した取組が重要と考える。

本校では、これまでも、保護者や学校運営協議会委員等に授業を公開してきた。今後は、地域住民へも公開を広め、学校だよりやホームページ等を活用し、更に広く学校の取組を発信し、地域全体で子どもを育てる土壌づくりを目指したいと考える。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

奈良市立都南中学校

自尊感情を高めるために、一人一人が大切にされる授業づくり、親和的な集団作りを進めてきた事例である。

教師が一方的に教えるのではなく、ペアやグループで考えたり活動したりすることを大切にした授業では、お互いに認め合える場を設定しやすい。授業の中で自尊感情を高め、主体的に学ぼうとする姿勢を育成するために効果的な学習スタイルである。また、集団づくりにおいても、少人数やグループでの話し合いを大切にしたことで、互いの思いを聞き合える雰囲気も培われた。生徒理解に役立つ「手だてシート」も大切な役割を果たしている。

基盤となる集団づくりと、学び合える授業づくりの大切さを共通認識できた上に、校種間連携の重要性も見えてきた取組であり、今後の更なる実践の高まりに期待されるものがある。